

## 首藤雨郊 その生涯と画業—大分市美術館所蔵品を中心に

岡村暢哉

### はじめに

首藤雨郊（1883年生まれ、1943年没）は、大分市出身で明治時代から昭和時代前期にかけて活動した教育者、日本画家である。大分の近代美術、特に日本画の展開を考える上で、首藤雨郊は、国主催の展覧会である帝国美術院展覧会（帝展）に3回入選経験があり、大正・昭和前期に大分県内の美術団体の設立に関与し、個展を開催するなどした重要な作家である。また、福田平八郎（1892年生まれ、1974年没）が美術学校に進学できるようその両親を説得した人物としても知られる<sup>1</sup>。

首藤については、その生涯を紹介する文献等は刊行されているが、その画業を回顧する文献等は見当たらない。大分市美術館では首藤の作品について、遺族・関係者からの受贈品等19点及び資料等2件を所蔵しており、本稿ではこれらを中心にして首藤の画業を見ていくことにしたい。

その前に、まずは文末に掲載した年譜を基にその生涯を見ていくことにする。なお、首藤は1908年に結婚するまで、旧姓岐津であるが、本稿では、首藤で統一することとしたい。

### 1. 首藤雨郊の生涯

首藤は1883（明治16）年11月15日、父岐津岩治、母ソデの三男として大分郡桃園村大字千歳（現大分市大字千歳）に生まれた<sup>2</sup>。本名は岐津積。1890年、桃園尋常小学校入学、1894年、鶴崎高等小学校入学、1898年、同校卒業。1901年、大分県師範学校入学、当時の図画教師は藤原美治郎であった。

因みに、福田平八郎の回想によれば<sup>3</sup>、福田が高等小学校3年生の頃、首藤は福田の実家に下宿していたという。これは1904～5年頃に当たり、福田の記憶が正しければ、首藤は師範学校学生時代に福田家に下宿していたことになる。

1905年、同校卒業、小学校本科正教員免許（大分県）取得。卒業後、大分郡植田高等小学校訓導となる。

しかし、首藤は以下のように述懐しており、本当の希望は異なっていたようである。

「どうしても画のことを忘れられず、無断で抜け出して、画かき修行に上方へ上ろうと思い、カンタンから船に乗ろうとすると明日でなくては船が出ないと止むを得ず師範の前の福田文房具店で一晩泊めてもらって翌日乗船しようとして居るところへ家から追手が来て連れ戻されたこともありました。その頃平八郎氏は中学生の二年生位でした」（『大分新聞』1932年7月23日）。画家となる志を捨てきれず、関西行きを試み、かつて、学生時代に下宿した福田文房具店に一夜の宿を借りたのであった。

1908年、大分郡西庄内村の首藤ルイと結婚して、首藤姓となった。植田高等小学校では教え子と由布登山をしたこともあった。

1909年10月、大分県師範学校訓導となる。その後、1911年3月休職し、同年4月京都市立絵画専門学校に入学、この時、福田平八郎の回想によれば、首藤と福田は銀閣寺近くの民家に間借りして共同生

<sup>1</sup> 狭間久『大分県文化百年史』1969年大分合同新聞社

<sup>2</sup> 首藤雨郊の生涯に関しては、その没後刊行された、首藤敬太他編『雨郊・首藤積』1972年首藤雨郊先生記念誌刊行会等に詳しい。

<sup>3</sup> 武藤完一「二豊風土記 首藤雨郊論」『大分合同新聞』1943年6月23日に、首藤雨郊の葬儀に参列した福田平八郎の追憶談として記されている。

活をしている。同年12月、師範学校中学校高等女学校図画科教員免許を取得。1912年4月、大分郡西庄内小学校訓導兼校長となり、1913（大正2）年2月、大分県立臼杵中学校教諭、1914年3月、大分県師範学校教諭となり、以後10年間勤務した。

この間、1915年頃、大正記念館に大分県所縁の賢人の肖像を掲出することになり、首藤は広瀬淡窓を担当した。

このほか、1916年、大野郡教育総会で講演、大分県師範学校の教諭として県内の教育関係者への講演活動も行っている。また、11月から1918年1月には師範学校の舎監を務めている。

1921（大正10）年3月、大分市で開催された第十四回九州沖縄八県連合共進会に合わせて開催された九州沖縄八県連合美術展の委員を務め《薩摩街道の冬》を出品している。また4月25日、九州沖縄図画教育大会座長を務めた。

この頃から、各種展覧会への出品が確認されるようになり、8月、黎明社作品展覧会（別府町）に《銀杏のある宮》を出品、同年10月、大分県美術会第1回展に《柿紅葉》《暮近し》《十一月の午後》を出品している。

また、翌1922年には大分県美術会第2回展に出品、秋にも同展に《霜の朝》を出品した。1923年11月、黎明社展に出品している。

1924年4月、満40歳で大分県師範学校を退職し、京都市下鴨芝本町に転居、画業に専念するようになった。退職に当たっては、大分県公会堂で壮行会が開催され、約2,500人が集まったといわれる<sup>4</sup>。

同年5月、8月には南豊美術会（大分市）に出品、本格的に画業に取り組むと、翌1925年、第6回帝国美術院展覧会（帝展）で《冬の日の叡山》が初入選。1927（昭和2）年1月4日には郷里大分の新聞豊州新報に正月用の作品図版《昭和丙寅冬》が掲載された。同6月、大分画壇日本画部展に出品。続いて1928年4月、中外産業博覧会（別府市）の美術館に《港町風景》を出品。また、同月、大分郡西庄内村に転居、京都の家は画室を残して他人に貸した。同月、福田平八郎とともに中国杭州、大連などを旅行したとみられる。10月、第9回帝展で《早春の鞍馬路》が入選。その後、10月25日には別府入港の紅丸で帰県している。この時は新聞に「秋の別府と耶馬溪を写生する為め二ヶ月位写生行脚やる考へである云々」と語っている。1929年1月1日、大分新聞に《富士山と寒林》掲載。また1月には大分市金池町に転居、更に1930年1月1日、大分新聞に《新年試筆》掲載。6月、大分会館新築書画展覧会に《秋景山水》出品。8月、大分市坊ヶ小路に転居、同年10月には第11回帝展で《村の秋晴》が入選した。この、3回目の帝展入選の秋、10月10日から21日にかけて首藤は、大分県師範学校時代の教え子で日本画家の本広礼とともに僧形で京都から山陰地方を巡る「山陰絵行脚」を行っている。この時使用した法衣は、実家岐津家の菩提寺である潮聞寺で借用したものであったという<sup>5</sup>。なお、この頃は、大分に居住しながら、5月に各画塾による展覧会を見るため京都へ入り、7月から10月頃まで京都に滞在して絵画制作に専念、12月は帝展の京都展を見るため京都入りするといったように、1年のうち3か月以上を京都で過ごしていた模様である。

1931（昭和6）年1月6日、豊州新報に《早春の朝》掲載。1月、大分県立三重高等女学校教授嘱託となる。1932年3月頃には当時の満州国執政御座所用として耶馬溪を描いた四曲屏風が買い上げになっ

<sup>4</sup> 注1 前掲書 59頁

<sup>5</sup> 注2 前掲書 148-151頁

たという<sup>6</sup>。因みに溝辺有巢によれば当該作品は1931年の帝展に出品し、周囲からは特選に入選するとの呼び声が高かったものの、意外にも落選した作品であったという。

この頃の制作の様子を自ら「製作中は、とても生真面目ですからなあ、昨年も、ある人が訪ねて来て、画家というものはこうまで努力するものとは知らなかったとひどく驚かれた事でした。全く食うことも寝ることも忘れて絵絹に向う時などは眼は血走って、痩せて…此の三ヶ月余で二、三貫は体重が減りますから」と述べている<sup>7</sup>。

このように首藤は帝展で入選を重ねつつ活動していたが、1932年7月、京都で大病を患い、帝展出品に向けた制作も出来なくなり、大分に戻った。その療養中、田能村竹田の詩文を読んで感じるころがあり、竹田作品に影響を受けた制作を行うようになる。同年秋、11月、大分県美術家協会第1回作品展覧会に《村の朝》を出品。また、1933年、大分県女子師範学校兼大分県立第二高等女学校教授嘱託となる。5月、大分県美術会第2回作品展に《別府郊外習作》《鯉》を出品し合評に参加。11月には、大分県美術会展覧会の合評に出席している。

1934年は田能村竹田の百回忌（百年祭）に当たる。田能村竹田は大分県の先賢の一人として尊敬を受けており、10月には大分県師範学校同窓会の依頼で描いた竹田の肖像画が大分県師範学校に寄贈され、10月20日に「竹田先生の画風その他」について講演している。また、11月には、大分新聞社主催第6回学童写生展の審査員を務めている。翌12月には、自ら竹田の詩を書し、画を添え、描き表装に仕立てた三幅対の作品を約30点制作し、展覧会を開催している。1936年8月には、大分市金池町に転居。1937年4月16日、首藤は松本古村、牧皎堂、河端石泉、武藤完一、中山和美とともに美術団体結成について会合を持った。その後、11月5日、第1回新光会展（大分市 一丸デパート）に出品、11月20日には第1回大分県美術協会展覧会に《花下笑語》を出品した。1938年8月、福田平八郎、権藤種男、高山辰雄、山中清一郎と首藤雨郊が大分市の桜町倶楽部で座談会を開催している。首藤50歳代、昭和10年代の活動は、大分県の美術団体の展覧会出品のほかは、新聞小説や教育雑誌等の挿絵寄稿などが確認されている。

1943（昭和18）年6月6日、死去。満59歳。葬儀は6月8日に行われ、画家では松本古村、福田平八郎、権藤種男らが参列し、大分郡庄内町の慶覚寺に葬られた。翌年には、教え子、友人により、大分市の万寿寺にも分葬墓が建立された。

次にその生涯の中で重要な側面である、教職と美術教育についてももう少し見ていくことにしたい。

## 2. 教職と美術教育

首藤の教師生活は大きく「小学校教師の時代」と「美術教師の時代」に分けることができるであろう。

首藤は少年時代から画家になることを望んでいたが美術学校に進学する状況にはなかったようである。本人の回想によれば「子供の時から画かきになりたかったのですが物質的に恵まれないものから師範に入れられました」という<sup>8</sup>。

首藤は1905（明治38）年、小学校本科正教員の免許を取得し、大分県師範学校を卒業。同年大分郡植田高等小学校に赴任して「小学校教師」としての歩みが始まる。1909年、植田高等小学校から大分県師

<sup>6</sup> 『豊州新報』1932年3月25日

<sup>7</sup> 『大分新聞』1932年7月23日

<sup>8</sup> 『大分新聞』1932年7月23日

範学校訓導となる。この段階で、首藤が有するのは小学校教員免許のみであることから、師範学校附属小学校の教員であるとみられる。この1909年から11年の間、首藤は師範学校では図画教育に力を注いでいた模様で、1910（明治43）年の『大分県共立教育会雑誌』第300号に「図画教育に就きて」、また、第304号「図画教授に就きて」を寄稿している。

第300号の「図画教育に就きて」は、当時の小学校教科の中で図画科を軽視する風潮に対する強い不満を著した随筆風の内容であるが、第304号「図画教授に就きて」は、小学校の尋常科、高等科各学年における図画の授業案を提示したもので、小学校における図画教育を児童の成長に応じて組み立てている。

明治期の大分県内の図画教育に関する論考は、『大分県共立教育会雑誌』『大分県教育雑誌』を確認する限り、大矢広、谷籙太郎等数人が執筆しているが、首藤のように図画科に関して小学校課程全体を見通した授業案は他に見当たらず、こうした授業案が実践できたかどうかは別にしても、明治末年頃の大分県における図画教育の展開を検証する上で、貴重なものといえよう。

また、首藤は師範学校の教員として同年12月25日から30日にかけて教員向けの冬期講習会で「図画教授法並実地事業」を担当していたほか、教育雑誌への寄稿や講習会の講師などを行っている。

その後、1911年3月、休職して京都市立絵画専門学校に入学。おそらくは画業に専念するため専門的に学びたいとの思いを持って休職したものと思われるが、家庭事情等により、1年に満たず退学。しかし、この間に師範学校、中学校、高等女学校図画科の免許を取得しており、1912年4月、大分郡西庄内小学校訓導兼校長を経て、10か月後の1913（大正2）年2月に大分県立臼杵中学校教諭となる。これ以降は「美術教師」として歩むことになる。さらに、1914年、今度は大分県師範学校に教員養成の図画科の教諭として勤務した。

日本の近代学校教育における美術（図画）教育は、明治初期以来、「鉛筆画教育」の時代、「毛筆画教育」の時代、「臨画教育」の時代、『新定画帖』の時代を経て大正8年頃に至り、「自由画教育」が提唱されるようになる<sup>9</sup>。首藤が大分県師範学校教諭として勤務していた時期はこの自由画教育が提唱された時期に一部該当する。首藤の師範学校での教え子などは、後年の回想によれば、概ね、首藤を自由画教育の大分県における主導者とみなしていた模様である。

首藤は大分県師範学校在職中の、1920年12月17日には大分新聞に「自由画に就て」と題し、所見を次のように述べている。

「◇自由畫といふものが何か別にあるものゝ様に考へられて居る向きもあるし、人は自由畫といふものを如何に解釋されて居るか知らないが、私は自由畫といふものは別に變つた畫でもなければ奇抜な畫でもない只子供の見た事感じた事を子供の表現法に依つて紙面に表したものであつて其處に又教育的價値はあるのであると思ふ。（以下略）」。

首藤は自由画を「子どもの見たこと、感じたことを子どもの表現法によって紙面に表したもの」と規定していたことがわかる。

師範学校における首藤の指導の様子は、教え子の回想にいくつか紹介されている。例えば、1915年、大分県師範学校卒業の三浦直政は以下のように述べる。

「先生の教育法は、みんなの持っているいいものを引き出して各自の個性を伸ばしてやろうという風

<sup>9</sup> 橋本泰幸『日本の美術教育 模倣から創造への展開』1994年明治図書

金子一夫『近代日本美術教育の研究—明治・大正時代—』1999年中央公論美術出版

であった。春日浦の松林や、新川の漁師町にスケッチに出かけたり、西大分の蜜柑山や、涵たんあたりを写生したり、いつも自由にのびのびと絵を描き楽しんだものである。また、京都からわざわざ扇面を取り寄せて、それに絵を描いたり、ホーロクにデザインして、壁飾りをこしらえたり、いつも生徒たちに興味ある指導をされた。また先生の鑑賞教育は独特のもので、今振り返って見ても感銘深いものがある。福田平八郎先生についての鑑賞や、竹内栖鳳、菊池契月、西山翠嶂、横山大観、下村観山、安田靫彦などの文展や院展出品画について、鑑賞批評を聞かせて頂いたことを思い出す。」<sup>10</sup>。

三浦はその後東京美術学校に進学しており、教え子の美術学校進学にも影響を与えている。

1921年、第十四回九州沖縄八県連合共進会（大分市）の一環として開催された九州沖縄八県連合美術展では委員として尽力。この会期中、4月25日には九州沖縄図画教育大会の座長を務めており、師範学校の図画教諭として大分の美術教育界を代表する立場にあったといえよう。

1924年、教職を辞して家族とともに京都に移住して画業に専念。一方、大分県師範学校には、翌25年4月に版画に強い関心を持つ武藤完一が赴任した。首藤はその後、3度帝展に入選し、1931（昭和6）年1月、約7年ぶりに大分県立三重高等女学校の図画嘱託教授として教壇に復帰した。師範学校の教諭の時よりは比較的自由的な立場であったと思われる。また、1933（昭和8）年5月、大分県女子師範学校兼大分県立第二高等女学校教授嘱託となっている。やはり嘱託であっても美術教育に携わっていたのである。

首藤の教職経験は図画教師としての役割にとどまらず、師範学校退職後も、教え子の面倒をよくみていた。例えば、1935年、当時の大分県人事課長に師範学校卒業生で、当時東京で教職に就いていた安東玉彦（後年1963年から75年まで大分市長を務めた）を大分県師範学校教諭に推薦した一人が首藤であった。こうしたこともあり、首藤没後も多くの教え子から思慕を受けていた模様である。ほかにも退職後、新聞社主催の児童図画展の審査員を務めており、間接的に子どもの図画教育に関わる機会があったといえる。やはり、首藤は生涯の長きにわたり、図画教育と深い関係を持っていたといえるであろう。

首藤は、明治後期、大分県下の図画教育黎明期に教育を受け、大正期。特に図画教育における自由画教育運動の展開期に、大分県師範学校の図画担当教諭として、大分県における図画教育と教員養成の中心的役割を担った人物であった。

次に首藤の作品を見ていくことにしたい。

### 3. 首藤の作品

首藤雨郊の絵画制作の動向が分かるのは、概ね1920年代以降である<sup>11</sup>。大分市美術館所蔵品、一時預かり品が20点及び資料等2件がある中、制作年代が確定している作品は11点及び下図1点である。また、ほぼ制作年代を推定できる作品が1点あり、ここではこれらを中心に紹介していきたい。

<sup>10</sup> 注2前掲書74-75頁

<sup>11</sup> 武藤完一によれば1956（昭和31）年に開催された「大分県美術協会物故七作家遺作展」（大分市・教育会館）に11点の出品作の中に「その他同氏（引用者注：首藤雨郊）が京都絵画専門学校の学生時代に、描かれた習作のはりませ屏風には、恐ろしく写実的な研究時代の作品があつて、学生達の良き手本としても、見逃してはならぬ作品である。」とあり（武藤完一「七画家の遺作展について」『大分合同新聞』1956年5月17日）、現段階では未確認であるが、習作ながら首藤の1911（明治44）年、28歳頃の作品が存在したことが分かる。

### 3-1.

#### 《薩摩街道の冬》1921（大正10）年頃 綿・麻（か）、着色 168.0×376.0cm 大分市美術館蔵（図1）

現存最初期の作品の一つとみられるのは《薩摩街道の冬》である。本作品は、日本画では珍しく麻と思われる生地に描かれた六曲一隻の屏風装となっている。

1921年に、大分市新川で開催された九州沖縄連合美術展に同名の作品が出品されており、同展開催中には新聞記事で以下のように取り上げられている。

「第五室の（中略）何といつても此の室では私は首藤積君の薩摩街道第一に推奨したいと思ふ殊に其描写が山林、畑、木立、家、街道、馬車、馬鶏とよくもあれまでに纏まつたと敬服する＝尤も前面の杉木立は今一息といふ處であるのは惜い事だ、而し同氏の此の大作もお隣の牧皎雨（ママ）の孔雀金屏風一雙と相良一滴のいで湯の朝と題する裸体畫に依つて多くの観覧者の眼が奪はれて行く（一記者）」（「美術展覽會視き 各室を彩る大作 日本画から観て歩く九州美術の精粹」『大分新聞』1921年3月18日）。

大画面の中に展開されている山間の街道筋の村落風景がよくまとまっていると評価されている。本作の樹木等に施された影の表現などに見られるように、大正中期頃は、当時活躍していた国画創作協会の画家が描いていた、陰影を強調する表現を意識的に用いた作品を制作していたとみられる。

なお、制作年が確定している最初期の作品は、1925（大正14）年、第9回帝展入選作品の《冬の日の叡山》（大分県立美術館所蔵）である。首藤は師範学校退職後、京都市下鴨に移住して画業に専念しており、本作は、京都の画室にほど近い洛北の農村から東北方向に聳える比叡山を望んで描いた作品。村の様子が印象的である。これも大正期の画壇に大きな影響を与えた国画制作協会の画家が描く作品の影響がみられる。

帝展入選を果たすと、郷里の大分でも「画家」として認められるようになる。例えば、大分県の地方紙豊州新報と大分新聞に首藤の作品図版が掲載されるようになったのである。両紙の1月中の紙面には中央の有名画家や大分出身で活躍中の画家の図版が挿画的に掲載されており、紙面の新年の祝賀気分を盛り上げている。首藤の作品は1927（昭和2）年、1月4日の豊州新報に「昭和丙寅冬」が掲載されたのが最初で、以後、1935（昭和10）年まで毎年のように掲載されている。比較的簡単に描かれた作品が目立つが、首藤の昭和前期の作画動向を追う上では参考になる。風景画やその年の干支に因んだものなどが描かれた。

### 3-2.

#### 《村の秋晴》1930（昭和5）年 紙本着色 227.0×186.0cm 第11回帝展（入選）大分市美術館蔵（図2 下図）（図3）

帝展では、1925（大正14）年、第6回展初入選後、1928（昭和3）年第9回展で《早春の鞍馬路》、1930年第11回展で《村の秋晴》がそれぞれ入選している。

本作品は日田の高瀬荒平に取材し、山村の秋の風景を描いた作品。第11回帝展入選作である。その取材については、「日田二葉」（おそらくペンネームであろう）が豊州新報に寄せた「恩師画伯」がその様子をよく伝えている。

《村の秋晴》は山村の農家を描いたものであるが、陰影による立体感は排除され、平面的で明るい色調の穏やかな昭和初期の首藤の作風を特徴づける作品であるといえる。

本作は制作に関する下図も残っており、画面下部の畑に植えられた作物の配置や、画面右中央の樹木

の描写等に大きな変更点が見られ、試行の過程をうかがうことができる。

### 3-3.

#### 《山陰絵行脚》1930（昭和5）年 紙本着色、個人蔵（図4）

1930年の秋には、10月10日から21日にかけて首藤は、大分師範学校時代の教え子で日本画家の本広礼とともに僧形で京都から山陰地方を巡る「山陰絵行脚」を行っている。

この「絵行脚」の成果は同年12月の大分新聞に、絵・首藤雨郊、文・本広礼で連載された。これは旅日記ともいふべきもので、京都、天橋立、鳥取、宍道湖、三段峡等の旅の様子が記録されている。本作はその原図で13図が二曲一隻屏風に貼り交ぜになっている。

### 3-4.

#### 《山水図》1933（昭和8）年 紙本墨画、紙本墨書

（画）120.0×25.3（書）120.0×21.5cm 大分市美術館蔵（図5）

#### 《二叟図》1934年 紙本着色、紙本墨書 134.1×28.0cm 他 大分市美術館蔵（図6）

#### 《閑牕讀古書》1937年 絹本墨画 127.6×34.0cm 大分市美術館蔵（図9）

#### 《幽居不知門外事》1938年 絹本墨画 129.0×34.2cm 大分市美術館蔵（図11）

#### 《秋溪間適》1938年 絹本墨画 129.6×27.2cm 大分市美術館蔵（図12）

首藤の画風が大きく変わる契機となったのは、1932（昭和7）年7月の大病であろう。病気によって、制作は中断し、療養生活を続ける中で田能村竹田の詩文を読む機会を得て、次第に深く感じ入るようになり、病気が落ち着いて再び制作に取り組むようになると、今度は田能村竹田の作品に影響を受けた南画風の作品を描くようになる。

大正期・昭和前期に活躍した日本画家は南画風の作品を描くことがあるが、首藤雨郊は田能村竹田に強い影響を受けた一人といえることができる。

先述したように首藤は田能村竹田の百回忌に当たる1934年に、竹田の詩を書し、自らの画を添えた三幅対の作品約30点を制作し、展覧会を開催している。《山水図》《二叟図》はそうした約30点の中の作品である。

また、《閑牕讀古書》《幽居不知門外事》《秋溪間適》は、田能村竹田の詩文に触れた以降、その影響を受けて制作した南画風作品である。

### 3-5.

#### 《良寛稚児焚火図》1936年 絹本着色 129.0×33.3cm 大分市美術館蔵（図7）

#### 《稚児焚火図》1936年 紙本着色 135.3×166.1cm 大分市美術館蔵（図8）

#### 《秋庭》1938年 絹本着色 160.8×186.2cm 大分市美術館蔵（図10）

#### 《晩秋山水図》1939年 絹本着色 130.0×33.5cm 大分市美術館蔵（図13）

首藤は1930年代後半頃、中国の詩人陶淵明や平安時代末の歌人西行、江戸時代中期越後の僧良寛に関する作品も制作している。《良寛稚児焚火図》《晩秋山水図》は良寛に因んだ作品である。いずれも南画風の作品が基本となっているが、一方で、1938（昭和13）年《秋庭》のように立体感を弱め明るい表現

による新日本画的な作品もあり、両方の表現を行っていたことがわかる。

良寛は子どもたちを愛し、寺の近所にいる子どもたちと遊ぶことを好んだと伝わることから、《良寛稚児焚火図》では良寛と子どもが仲良く焚火を囲む図を描いている。《稚児焚火図》では良寛は描かれず、子どもたちの服装も昭和初期のものとみえるので、首藤雨郊が同時代の子どもたちを描いたものであるといえるが、小学校教師を経験し、良寛に共感を寄せた首藤の子どもに対する愛情にあふれた作品とみることもできよう。

1937年には、大分県美術協会の結成に参加し、第1回に《花下笑語》を出品している。また、『大分県教育』の1936年1月発行の第603号から1941年1月発行の663号まで、時折休載しながらも挿絵を描いている。このほか、1938年には、大分新聞に連載された小説「広瀬淡窓」の挿絵も描いている。新聞や雑誌への寄稿は首藤の晩年に近い頃の仕事のひとつということができよう。

このように、首藤の絵画制作は、大正後期には陰影を強調した作品、昭和初期には平面的で明るい色調の作品、昭和7年後半以降は南画風の作品へと変遷していったといえる。この中でも帝展に入選した3点の作品は首藤の代表的作品ということができよう。

## おわりに

首藤は大分県師範学校の卒業生で、明治30年代終わり頃から教師として勤務し、母校大分県師範学校の図画教師となったのは、首藤の前任の田川豊山と首藤雨郊自身くらいであり、大分県の美術教育にとっても重要な人物のひとりでもあったといえる。

1921(大正10)年頃から本格的に制作活動を始め、1922年の教師退職後は画家に専念。その後、嘱託教師を務めながらも制作を続け、大正から昭和前期の大分で活躍した日本画家のひとりであった。1943(昭和18)年、59歳で生涯を終えた。没後、武藤完一は首藤を「大分県美術協会の元老として県画壇の重鎮として、又元大分師範の教諭としてその功績は今更筆者如きが喋々を要しない県下周知の事」と紹介している<sup>12</sup>。

今回は大分市美術館所蔵品を中心に分析を行った。1920(大正10)年以前の作品が確認されておらず、また、福田平八郎との関係もまだ十分に明らかになっていない。これらを含めた全体像の解明をなお続ける必要があると思われる。

なお、本稿の作成にあつては、首藤洲宏氏、加崎悠紀夫氏をはじめ関係者のご協力をいただいた。記して感謝を申し上げます。

## 参考文献等

### □書籍・図録

『大分県美術協会物故七作家遺作展』1956年5月16日～20日(大分県教育会館)

日展史編纂委員会編『日展史』

東京文化財研究所編『日本美術年鑑』

『昭和56年度大分県出身作家調査報告書』1982年大分県立芸術会館

大塚富吉『大分県画人名鑑』

首藤敬太他『雨郊・首藤積』1972年首藤雨郊先生記念誌刊行会

<sup>12</sup> 武藤完一「二豊風土記 首藤雨郊論」『大分合同新聞』1943年6月23日



安東玉彦『市勢随想』1975年安東玉彦図書刊行会

安東玉彦「あの頃あの人」『大分合同新聞』1981年2月~4月

後藤龍二『大分県美術協会史料』1988年

後藤龍二『大分の近代美術』1992年海鳥社

後藤龍二『大分県近代美術史年表』1996年

『大分県教育百年史 第一巻』1976年大分県教育委員会

『大分県史 美術篇』1981年大分県

『大分市史 下巻』1956年大分市

『大分市史 下』1988年大分市

#### □新聞記事

「図画の選に就いて」(談)『大分新聞』(朝)1921年1月1日

「九州沖縄連合共進会彙報 畢生の大作を出品すべく美術家連の苦心」『大分新聞』(夕)1921年1月28日 ※九州図画教育大会

「全九州産業の粹を蒐めた八県連合空前の大共進会」『大分新聞』(夕)1921年3月15日

※美展入選画…薩摩街道の冬 大分県 首藤雨郊

「美術展覧会覗き 各室を彩る大作 日本画から観て歩く九州美術の精粹」『大分新聞』1921年3月18日

「現代大家の力作を蒐めた日本画大展覽会」『大分新聞』1921年4月4日

※「東都諸大家新作日本画展覽会」(市内竹町糸園呉服店新館楼上)の開催に首藤等が応援

「九州美術大会県公会堂に開催さる」『大分新聞』1921年4月26日

※九州沖縄八県連合美術大会…首藤積が提案、九州沖縄連合図画教育大会…首藤積座長

「別府黎明社の作品展覧会」『大分新聞』(夕)1921年8月21日

※首藤積「銀杏のある宮」

「蓋を開けた美展」『大分新聞』(夕)1921年11月6日

※大分県美術会美術展…首藤積「柿紅葉」「暮近し」「十一月の午後」

「大分県美術会 美展第一日 非常に賑ふ」『大分新聞』(夕)1922年4月8日

「下毛郡庁舎完成記念美術展」『大分新聞』1922年12月5日

「首藤前男師教諭が初めて入選 喜びの涙を流す加崎春日校長 金池校に万歳の叫び」『大分新聞』(夕)

1925年10月14日

「帝展に初入選して一躍名声を馳せた首藤積氏と画室」『大分新聞』(夕)1925年10月21日

「(図版)昭和丙寅冬 首藤積氏筆」1927年1月4日(大正天皇死去により諒闇中)

「(図版)疎林寒鴉 首藤積」『豊州新報』1928年1月1日

「帝展日本画部と工芸美術入選者」『大分新聞』(夕)1928年10月13日

「入選の喜び 今回で二回入選した首藤氏」(加崎春日町校長談)『大分新聞』(夕)1928年10月13日

「帝展日本画入選発表さる」『豊州新報』(朝)1928年10月14日

屋田得三「帝展入選の「早春の鞍馬路」雨功首藤積先生の作品に就て」『豊州新報』(夕)1928年10月21日

- 「秋の別府と耶馬を写生行脚」『豊州新報』(夕) 1928年10月26日  
本広礼「早春の鞍馬路 首藤積氏の帝展出品作」(2回)『大分新聞』(朝) 1928年10月26日、28日  
「(図版) 首藤雨功氏作」『豊州新報』1929年1月1日  
「(図版) 田家の朝 首藤積」『大分新聞』(夕) 1928年1月7日  
日田二葉「恩師画伯」『豊州新報』1929年11月21日  
※首藤雨郊「村の秋晴」取材の様子がよくわかる  
「(図版) 新年試筆 首藤雨功氏作」『豊州新報』(朝) 1930年1月1日  
「(図版) 年頭試筆 首藤雨功」『大分新聞』1930年1月7日  
「郷土色溢れる大分会館の書画展」『大分新聞』1930年6月27日 ※首藤雨郊「秋景山水」  
「帝展日本画の発表」『豊州新報』1930年10月18日  
「山陰絵行脚 絵首藤積 文本広礼(一)」『大分新聞』1930年11月25日  
「(図版) 早春の朝 首藤積氏作」『豊州新報』(夕) 1931年1月6日  
「(図版) 新年試筆 首藤積」『大分新聞』(夕) 1931年1月7日  
「(図版) 新年試筆 首藤雨郊」『大分新聞』(朝) 1932年1月1日  
「首藤積画伯の傑作買上げ 満洲国新政府執政御座所用として」『豊州新報』(朝) 1932年3月25日  
「本県美術家協会日本画展覧会」『大分新聞』(朝) 1932年11月25日 ※首藤積「村の朝」  
「(図版) 高音 首藤積氏作」『豊州新報』(朝) 1933年1月1日  
「(合評) 大分県美術家協会第二回作品展日本画合評」『大分新聞』1933年5月23日  
※牧皎堂「神宮寺浦」、首藤雨郊「別府郊外習作」「鯉」の評有  
「大分県美術家協会第二回作品発表展」『大分新聞』(朝) 1933年5月26日  
※首藤積「鯉」「別府郊外習作」、牧皎堂「葡萄牙船」  
「大分県美術展ふたあけ」『大分新聞』(夕) 1933年5月27日  
「(審査評) 写生大会一等審査評 武藤完一 首藤積」『大分新聞』1933年11月26日  
「(展示) 大分会館の耶馬画展」『大分新聞』(朝) 1933年12月21日  
※首藤雨郊氏筆二尺絹本「麗溪の色」  
「第六回学童写生展 審査評 武藤完一 首藤積」『大分新聞』(夕) 1934年11月20日  
「第五回大分県美術家協会作品発表展合評」『大分新聞』(夕) 1934年11月11日  
「秋の県美術界を彩る作品発表展」『大分新聞』(朝) 1934年11月9日  
※首藤雨郊「村の朝」出品  
「学童写生大会号 審査評 首藤積 武藤完一」『大分新聞』1934年6月10日  
「県美術家協会の第四回作品発表展」『大分新聞』(朝) 1934年5月19日 ※首藤雨郊…(作品名空欄)  
「美術家協会作品展 大分会館でふた開け」『大分新聞』(夕) 1934年5月20日  
※首藤雨郊…水彩画の近作《町裏》を出品  
「大分県美術家協会第四回作品展洋画合評【上】」『大分新聞』1934年5月21日  
「(図版) 梅花狗兒 首藤雨郊画伯筆」『豊州新報』(朝) 1934年1月12日  
「師範同窓会から竹田肖像画母校へ贈る」(首藤雨郊画)『大分新聞』(夕) 1934年10月20日  
「竹田の詩文を主題の首藤積氏作品展」『大分新聞』(朝) 1934年12月1日  
「首藤積氏作品展 八、九両日大分会館で」『大分新聞』(夕) 1934年12月8日

- 「(図版) 新年試筆 首藤雨郊」『大分新聞』(朝) 1935年1月1日
- 「(図版) 新春試筆 首藤雨郊氏」『豊州新報』(朝) 1935年1月1日
- 「(図版) 大分市 雨郊 首藤積氏筆」『豊州新報』(朝) 1935年5月14日
- 「(審査評) 第八回学童写生展 審査評 武藤完一 首藤積」『大分新聞』(夕) 1935年11月22日
- 「(座談会) 小学図画座談会【上】【下】」『大分新聞』(朝) 1935年11月26日、27日(第二高女首藤積他)
- 「(図版) 海上雲遠 首藤雨郊氏」『大分新聞』(朝) 1936年1月18日
- 「(図版) 首藤雨郊画伯筆」『豊州新報』(朝) 1936年1月19日
- 「(展示) 大分市表具組合第三回表装展」『大分新聞』(朝) 1936年11月2日
- 「(図版) 雨郊生」『豊州新報』1937年1月1日
- 「(装画) 勅題「田家雪」首藤雨郊氏」『大分新聞』(朝) 1937年1月1日
- 「(図版) 牛背老子 丁丑元旦 首藤雨郊氏作」(夕)『豊州新報』1937年1月5日
- 「(図版) 新年試筆 首藤雨郊」『大分新聞』(朝) 1937年1月6日
- 首藤雨郊「画房偶語 1、2」『大分新聞』(朝) 1937年5月7日、9日
- 「(図版) 花下笑語 首藤雨郊(大分県美術協会展)」『豊州新報』(夕) 1937年11月22日
- 「(装画) 戦勝の春 首藤雨郊氏」『大分新聞』(朝) 1938年1月1日
- 「(図版) 新年試筆 首藤雨郊氏」『大分新聞』(夕) 1938年1月5日
- 「(談) 頗る有意義 首藤、糸園両氏の賛辞 大友宗麟公銅像祭」『大分新聞』(夕) 1938年3月19日
- 「(図版) 祝創刊五十年 首藤雨郊」『大分新聞』(夕) 1938年7月11日
- 「(小説挿絵) 廣瀬淡窓 絵首藤雨郊【1】～【66】」『大分新聞』(朝) 1938年8月20日～11月3日
- 「新光会絵画展賑わう」『大分新聞』(朝) 1938年11月6日
- 「(図版) 己卯新春 首藤雨郊氏画」『豊州新報』(夕) 1939年1月8日
- 「(訃報) 首藤積氏」『大分合同新聞』(朝) 1943年6月7日
- 武藤完一「二豊風土記 首藤雨郊論」『大分合同新聞』1943年6月23日
- 「首藤積氏の墓 十日除幕式」『大分合同新聞』1946年11月8日
- 「大分市人物風土記(36)」『大分合同新聞』(夕) 1954年4月20日
- 武藤完一「七画家の遺作展について」『大分合同新聞』1956年5月17日
- 「大分県美術百年(14) 首藤積と福田平八郎」『大分合同新聞』1967年5月1日
- 「南豊画人名鑑118(府内地方) 首藤雨郊、阿部梅處」『大分合同新聞』(夕) 1974年11月16日
- 「大分近代日本画展 行動大分作家展 芸術会館で開く」『大分合同新聞』(朝) 1979年5月24日※首藤雨郊「港町風景」等出品
- 「大分近代日本画展から6 冬の日の叡山 首藤雨郊」『大分合同新聞』(夕) 1979年6月13日
- 安東玉彦「あの頃あの人(48) 雨郊先生と師弟愛」(連載)『大分合同新聞』1981年4月8日
- 「首藤雨郊作の屏風遺族が大分市に寄付」『大分合同新聞』(朝) 1994年12月15日
- 「首藤雨郊 鯉「首藤コレクション 幻の日本画名品展」」『毎日新聞』1999年12月8日
- 「首藤コレクション『幻の日本画展』から 岩倉里初冬 首藤雨郊」『大分合同新聞』2000年7月20日
- 吉田浩太郎「大分の美術」ガイド(中) 県立芸館で開催中」『大分合同新聞』(朝) 2002年6月13日

大分市美術館 令和2年度（2020年度）調査・研究報告

「(図版) 常設展示リニューアル大分市美術館 首藤雨郊「秋庭」」『大分合同新聞』(夕) 2008年1月31日

「31歳の死」本広礼に贈った作品公開」『大分合同新聞』2009年9月24日

岡村暢哉「首藤雨郊 高倉観崖 牧皎堂の活躍」『大分合同新聞』2013年11月15日

□教育雑誌『大分県教育雑誌』『大分県教育』

首藤積「図画教育につきて」『大分県教育雑誌』300号 1910年

首藤積「図画教授につきて」『大分県教育雑誌』304号 1910年

※教育人事や講演会、図版掲載に関する記事等は年譜に掲載。

## 首藤雨郊年譜

西暦	年号	干支	首藤雨郊年齢(満年齢) ※11月15日に達する年齢	事項	作品
1883	明治16年	癸未	0歳	11月15日大分郡桃園村大字千歳140番地に生まれる。本名積(『昭和56年度大分県出身作家調査報告書』1981年)、父 岐津岩治、母 ソデの三男。(『雨郊首藤積』1972年)	
1890	明治23年	庚寅	7歳	4月、桃園尋常小学校入学。(『雨郊首藤積』1972年)	
1894	明治27年	甲午	11歳	4月、鶴崎高等小学校入学。(『雨郊首藤積』1972年)	
1898	明治31年	戊戌	15歳	3月、鶴崎高等小学校卒業。(『雨郊首藤積』1972年)	
1901	明治34年	辛丑	18歳	4月、大分県師範学校入学。(『雨郊首藤積』1972年)	
1904	明治37年	甲辰	21歳	この頃、大分県師範学校近くにあった福田平八郎の実家に下宿していた(雨郊の葬儀に帰郷した福田平八郎の追憶談を武藤完一が聞き取り『大分新聞』1943年6月23日)	
1905	明治38年	乙巳	22歳	3月、大分県師範学校卒業。(『雨郊首藤積』1972年) 小学校本科正教員免許(大分県)。(『雨郊首藤積』1972年) 3月31日 大分郡植田高等小学校訓導 八級上俸。(『雨郊首藤積』1972年)	
1908	明治41年	戊申	25歳	5月、大分郡西庄内村首藤ルイと結婚。首藤姓となる。(『雨郊首藤積』1972年)	
1909	明治42年	己酉	26歳	10月、大分県師範学校附属小学校訓導。(『雨郊首藤積』1972年)	
1910	明治43年	庚戌	27歳	2月、首藤積「図画教育につきて」『大分県教育雑誌』300号(2月28日発行) 6月、首藤積「図画教授につきて」『大分県教育雑誌』304号(6月30日発行) 12月25日～30日(教員向け)冬期講習会「図画教授法並実地授業」『大分県教育雑誌』309号(11月30日発行)	
1911	明治44年	辛亥	28歳	3月休職。(『雨郊首藤積』1972年) 4月京都市立絵画専門学校入学。(『雨郊首藤積』1972年) この頃、銀閣寺近くの民家を借り、福田平八郎と共同生活する。 「首藤先生は訓導時代、京都の絵画専門に一年程在学されたが、美術学校に通っていた私と銀閣寺の民家に間借りし、共同生活を営んだ。先生は牛肉が好きで毎日私と五銭宛出し合い夕食にしたが、翌日の弁当のおかずをそれを定まって残すのが例であった…島原に外人旅行家が公開飛行を行ったのもこのころで、先生と私は銀閣寺からの往復二里余を歩いて見に行つた。ところが入場料二十銭の金が無く、外から見たが肝腎の飛行機の発着は幕が張り巡らされて見ることが出来なかつた。帰途腹がペコペコになつて神楽坂の焼芋屋で二銭宛出し合つて焼芋を買つて食つたが今でもあのうまかつた味は忘れられぬ。夜など一里位距つた京極辺りまで散歩に出てよく二人でこの焼芋を食つた」(福田平八郎「首藤積先生を憶ふ」『大分合同新聞』1943年、原典が確認できず、狭間久『大分県文化百年史』57頁を引用) 12月師範学校中学校高等女学校図画科教員免許(文部省)第四五六五号。(『雨郊首藤積』1972年)	※「京都絵画専門学校の学生時代に、描かれた習作」が1956(昭和31)年に開催された「大分県美術協会物故七作家遺作展」に出品されている。
1912	明治45年	壬子	29歳	4月大分郡西庄内小学校訓導兼校長(『雨郊首藤積』1972年)	
1913	大正2年	癸丑	30歳	2月大分県立臼杵中学校教諭(『雨郊首藤積』1972年)	
1914	大正3年	甲寅	31歳	3月大分県師範学校教諭(『雨郊首藤積』1972年)	
1915	大正4年	乙卯	32歳	大分市春日町(現西春日町1丁目)に自宅を新築。(『雨郊首藤積』1972年) この頃大正記念館に廣瀬淡窓の肖像画が掲示される(「大分県教育雑誌」第369号) ※大正記念館に掲示された肖像画…田能村竹田(松本古村)、福沢諭吉(権藤種男)	《[廣瀬淡窓の肖像画]》(大正記念館)(※大正記念館…大分県教育会の附属施設、会合や研修に利用『大分県教育百年史』第1巻890頁)
1916	大正5年	丙辰	33歳	(7月)、大野郡教育総会で講演(「大分県教育雑誌」第377号) 11月22日大分県師範学校舎監(兼)となる(「大分県教育雑誌」第384号1917年) この年、大分県農業教育養成所講師嘱託(兼)となる(「大分県教育雑誌」第374号)	

1917	大正6年	丁巳	34歳		
1918	大正7年	戊午	35歳	1月22日大分県師範学校舎監を免ぜられる(『大分県教育雑誌』第396号1918年)	
1919	大正8年	己未	36歳		
1920	大正9年	庚申	37歳	12月17日「自由画に就て」寄稿(『大分新聞』)。 「◇自由画といふものが何か別にあるものゝ様に考へられて居る向きもあるし、人は自由画といふものを如何に解釋されて居るか知らないが、私は自由画といふものは別に變つた畫でもなければ奇抜な畫でもない只子供の見た事感じた事を子供の表現法に依つて紙面に表したものであつて其處に又教育的價値はあるのであると思ふ。(以下略)	
1921	大正10年	辛酉	38歳	3月 九州沖縄八県連合美術展(大分市)に《薩摩街道の冬》を出品する。(『大分の近代美術』) 4月3日東都諸大家新作日本画展覧会(大分市竹町・糸園呉服店新館楼上)の準備に協力する(『大分新聞』1921年4月4日)。 4月25日九州沖縄八県連合美術大会委員を務める(『大分新聞』1921年4月26日)。 4月25日九州沖縄函画教育大会座長を務める(『大分新聞』1921年4月26日)。 8月20日黎明社作品展覧会(8月20日～22日 別府町・町会議事堂)に《銀杏のある宮》を出品する(『大分新聞』1921年8月21日)。 11月5日大分県美術会第1回展に《柿紅葉》《暮近し》《十一月の午後》を出品する(『大分新聞』1922年11月6日、『大分の近代美術』)。	《薩摩街道の冬》(九州沖縄八県連合美術展)(大分市美術館) 《銀杏のある宮》(黎明社作品展覧会) 《柿紅葉》《暮近し》《十一月の午後》(大分県美術会第1回展)
1922	大正11年	壬戌	39歳	4月7日大分県美術会第2回展に出品する(『大分新聞』1922年4月8日、『大分の近代美術』)。 11月17日大分県美術会(11月17日～19日 大分市女子尋常高等小学校)に《霜の朝》出品する(『大分の近代美術』)。 12月17日下毛郡庁舎落成記念美術展(12月17日～19日 下毛郡新庁舎)に《竹田附近の秋》出品(『大分新聞』1922年12月5日)。 11月10日黎明社(11月10日～12日 大分市糸園呉服店)に出品する(『大分の近代美術』)。	《霜の朝》(大分県美術会第2回展) 《竹田附近の秋》(下毛郡庁舎落成記念美術展)
1923	大正12年	己亥	40歳		
1924	大正13年	甲子	41歳	4月大分県師範学校退職。(『雨郊首藤積』1972年) 京都府京都市下鴨芝本町23-1に転居。画業に専念。(『雨郊首藤積』1972年) 5月、8月南豊美術会(大分市)に出品する(『大分の近代美術』)。	
1925	大正14年	乙丑	42歳	第6回帝展《冬の日の叡山》入選。	《冬の日の叡山》(第6回帝展)(大分県立美術館) 《[芥子]》(『大分新聞』)
1926	大正15年	丙寅	43歳		
1927	昭和2年	丁卯	44歳	1月4日《昭和丙寅冬》掲載(『豊州新報』)。 6月4日大分画壇日本画部展(6月4日～6日 大分市第一高等女学校)に出品する(『大分の近代美術』)。	
1928	昭和3年	戊辰	45歳	1月1日《疎林寒鴉》掲載(『豊州新報』)。 4月1日中外産業博覧会美術館(4月1日～5月7日 別府市 別府公園内美術館)に《洛北早春》出品。(『大分県美術協会史料』)(『大分の近代美術』)※出品者住所は「京都」 4月 大分郡西庄内村に転居。(『雨郊首藤積』1972年) ※京都の家は画室を残して他人に貸し、時折滞在して画を描く。(『大分新聞』1932年7月23日) 10月 第9回帝展《早春の鞍馬路》入選。 10月25日別府入稿の紅丸で帰省。新聞記者に「秋の別府と耶馬溪を写生する為め二ヶ月位写生行脚やる考へである云々」と語る(『豊州新報』1928年10月26日)。 この年、中国旅行?(福田平八郎とともに石仏、首藤定邸で写る写真がある)	《昭和丙寅冬》(『豊州新報』) 《早春の鞍馬路》(第9回帝展入選)
1929	昭和4年	己巳	46歳	1月1日図版《富士山と寒林》掲載(『大分新聞』)。 1月 大分市金池町(学校西隣)に転居。(『雨郊首藤積』1972年)	《富士山と寒林》(『大分新聞』)
1930	昭和5年	庚午	47歳	1月1日《年頭試筆》掲載(『大分新聞』)。 6月26日大分会館新築書画展覧会に《秋景山水》を出品(『大分新聞』1930年6月27日)。 8月 大分市坊ヶ小路(現錦町)に転居。(『雨郊首藤積』1972年) 10月 第11回帝展《村の秋晴》入選。(『雨郊首藤積』1972年) 10月10日～21日頃本廣禮と共に法衣で山陰絵行脚を行う。京都嵯峨野、広島県三段峡などを巡る。(『雨郊首藤積』1972年) 11月25日～12月4日 大分新聞に「山陰絵行脚(絵・首藤積 文・本廣禮)」9回連載。(『雨郊首藤積』1972年)	《年頭試筆》(『大分新聞』) 《村の秋晴》(第11回帝展)(大分市美術館) 《秋景山水》(大分会館新築書画展覧会) 《山陰絵行脚》(絵・首藤積 文・本廣禮)

1931	昭和6年	辛未	48歳	1月6日《早春の朝》掲載(『豊州新報』)。 1月7日《新年試筆》掲載(『大分新聞』)。 1月 大分県立三重高等女学校教授嘱託。(『雨郊首藤積』1972年) この頃、個展(中国 大連)(『雨郊首藤積』1972年 P66-67溝辺有巢の回顧)	《早春の朝》(『豊州新報』) 《新年試筆》(『大分新聞』)
1932	昭和7年	壬申	49歳	1月7日《新年試筆》掲載(『大分新聞』)。 3月頃 首藤積作耶馬溪の紅葉谷を描いた四曲屏風(縦6尺5寸、横8尺、1929年作)が満州国執政御座所用として買い上げになる。(『豊州新報』1932年3月25日)。 7月 京都で大病を患う。帝展出品作の制作できず、大分に帰郷し、療養。(『大分新聞』1932年7月23日) 11月25日大分県美術家協会第1回作品展覧会(大分市・大分会館)に《村の朝》を出品(『大分新聞』)。 ※この頃(昭和7年7月は大分に滞在中だが、例年7月から10月までの4か月間を画を描くため京都で過ごす。また5月に1回各画塾の展覧会を見るため、12月に1回帝展京都展を見るため京都入りする。(『大分新聞』1932年7月23日) ※京都の画室…京都市下鴨芝本町23-1(『大分新聞』1932年7月23日) ※「製作中は、とても生真面目ですらかなあ、昨年も、ある人が訪ねて来て、画家というものはこちらまで努力するものとは知らなかったとひどく驚かれた事でした。全く食うことも寝ることも忘れて絵絹に向う時などは眼は血走って、痩せて…此の三ヶ月余で二、三貫は体重が減りますから」(『大分新聞』1932年7月23日)	《新年試筆》(『大分新聞』) 《[耶馬溪の紅葉谷を描いた四曲屏風]》(『豊州新報』)※但し、溝辺有巢によれば、本作は1931年の帝展で特選を噂されながら選外となった作品(これが正しければ制作年は1931年頃)(『雨郊・首藤積』)
1933	昭和8年	癸酉	50歳	5月 大分県女子師範学校兼大分県立第二高等女学校教授嘱託。(『雨郊首藤積』1972年) 5月 大分県美術家協会第2回作品展に《別府郊外習作》《鯉》出品。(『大分新聞』1933年5月28日付)。 5月28日 大分県美術家協会第2回展合評掲載(『大分新聞』)。 11月6日 大分県美術家協会作品展日本画合評掲載(『大分新聞』)。 12月15日 耶馬溪画展(12月15日～22日 耶馬溪絵画協会主催 大分市・大分会館)に2尺絹本《麗溪の色》出品(『大分新聞』1933年12月21日)。	《別府郊外習作》《鯉》(大分県美術家協会第2回作品展) 2尺絹本《麗溪の色》(耶馬溪画展) 《山水図》(大分市美術館)
1934	昭和9年	甲戌	51歳	1月12日《梅花狗児》掲載(『豊州新報』)。 5月19日 第4回大分県美術家協会作品展(洋画のみ)に《町裏》出品(『大分新聞』1934年5月19日)(『大分県美術協会史料』)。 5月21日 第4回大分県美術家協会作品展合評掲載(『大分新聞』)。 「(町裏 首藤積)(作者=どうせ出さねばならぬ言質があったので出品しました。油で画かうと思ったのだがやって見るとばかり傘紙の生に画きました)一番愉快に感じた。線がいい。あの試みには共鳴出来る。先生のあの試作には大いに学ぶところがある。デフィにあの線がある。先生の意気に押されて仕舞った。無技功の技功がある。首藤さんの出品は大きい繁輝であることを疑はない。」 10月20日 大分師範同窓会の依頼により田能村竹田の肖像画を描く。同作品は大分県師範学校に寄贈。10月20日、首藤「竹田先生の画風その他」について講演(『大分新聞』1934年10月18日)。 11月9日 第5回大分県美術家協会展(大分市・大分会館)に《村の朝》出品(『大分新聞』)。 11月11日 第5回大分県美術家協会展合評掲載(『大分新聞』)。 11月 大分新聞社主催第6回学童写生展(大分市・大分会館)審査員を務める(『大分新聞』1934年11月20日夕刊)。 12月8日 首藤積氏作品展(個展、田能村竹田の詩文を主体 12月8日～9日 大分会館階上)(『大分新聞』)。	《梅花狗児》(『豊州新報』) 田能村竹田の肖像画を描く。同作品は大分県師範学校に寄贈。 《村の朝》(第5回大分県美術家協会展) 《二叟図》(大分市美術館) 《松溪聴泉》(大分県立美術館)
1935	昭和10年	乙亥	52歳	1月1日《新年試筆》掲載(『大分新聞』)。 11月 大分新聞社主催第8回学童写生展審査員を務める(『大分新聞』1936年11月22日夕刊)。	《新年試筆》(『大分新聞』) 《田能村竹田像》(大分県立美術館)
1936	昭和11年	丙子	53歳	1月～「瓶梅」掲載(『大分県教育』1月、603号)、「良寛さま」(2月、604号)、「山居閑適」(3月、605号)、「武蔵野の西行」(4月、606号)、「飯塚」(9月号、611号)、「漁樵問答」(10月、612号)、「山村清趣」(11月、613号)、「田園清趣」(12月、614号) 4月頃 病床に臥せる(『大分県教育』607号)※これにより『大分県教育』への連載中断 8月 大分市金池町に転居。 11月2日大分市表具組合第3回表具店(1日～3日 大分会館)に個人蔵「水墨山水」展示。	《良寛稚児焚火図》(大分市美術館) 《稚児焚火図》(大分市美術館)
1937	昭和12年	丁丑	54歳	1月～「花下睡人」掲載(『大分県教育』(1月、615号)、「枯魚」(2月、616号)、「草堂聴雨」(10月、624号)、「秋艇讀書」(11月、625号)、「爐邊讀書」(12月、626号) 4月16日 首藤雨郊、松本古村、牧岐堂、河端石泉、武藤完一、中山和美の6名が美術団体結成について会合(大分市トキハ百貨店)(『大分の近代美術』)。 5月7日 「画房偶語」掲載(5月7日、9日『大分新聞』)。 11月5日 第1回新光会展(大分市 一丸デパート)に出品(『大分の近代美術』)。 11月20日 第1回大分県美術協会展覧会に《花下笑語》を出品(『大分の近代美術』)。	《花下笑語》(第1回大分県美術協会展覧会) 《閑牕讀書》(大分市美術館) 《港町風景》(大分県立美術館)

1938	昭和13年	戊寅	55歳	1月～「神苑朝」掲載『大分県教育』(1月、627号)、「寒村二品」(2月、628号)、「寒山子」(3月629号)、「樹下笑話」(4月、630号)、「秋窓読書」(9月、635号)、「柴門の芭蕉」(10月、636号)、「芭蕉」(12月、638号) 7月11日「祝創刊五十周年」(大分新聞)掲載(『大分新聞』)。 8月 福田平八郎、権藤種男、高山辰雄、山中清一郎らと首藤雨郊らが座談会(大分市桜町倶楽部)(『大分の近代美術』)。 8月22日～11月30日 新聞小説「廣瀬淡窓」(文:香春建一、1～91)の挿絵掲載(『大分新聞』)※12月以降も連載が継続された可能性があるが、確認不能	《祝創刊五十周年》(『大分新聞』) 《秋庭》(大分市美術館) 《幽居不知門外事》(大分市美術館) 《秋溪間適》(大分市美術館) 《[大分県教育雑誌挿絵]》《[新聞小説廣瀬淡窓挿絵]》
1939	昭和14年	己卯	56歳	1月～「(無題、人物)」掲載『大分県教育』(1月、639号)、「(無題)花卉」(2月、640号)、「(無題、風景)」(3月、641号)、「春尽」(4月、642号)、「唯有真実在」(9月、647号)、「月下」(10月、648号)	《晚秋山水図》(大分市美術館) 《[大分県教育雑誌挿絵]》
1940	昭和15年	庚辰	57歳	1月～「瑞雲舞」掲載『大分県教育』(1月、651号)、「(猫)」(3月、653号) 1月12日 皇紀二千六百年奉祝全国学童図画展(大分県分)の審査を行う(他に武藤完一、宮崎豊、宮野蔵人)(場所:大分県教育会館)(『大分県教育』653号)	《[大分県教育雑誌挿絵]》
1941	昭和16年	辛巳	58歳	1月 「菊」掲載『大分県教育』(1月、663号)	《[大分県教育雑誌挿絵]》
1942	昭和17年	壬午	59歳		
1943	昭和18年	癸未	59歳	6月6日死去。(数え61歳)(『雨郊首藤積』1972年) 6月8日大分市金池町の自宅で葬儀。(『雨郊首藤積』1972年) 法名 積徳院釈雨郊居士。(『雨郊首藤積』1972年) 墓所 大分郡庄内町西庄内字深谷 覚慶寺(真宗大谷派)(『雨郊首藤積』1972年)	
1944	昭和19年	甲申		秋 大分市金池町万寿寺(臨済宗妙心寺派)寺内に分葬墓碑建立。(『雨郊首藤積』1972年)	
1946	昭和21年	丙戌		11月10日墓碑除幕式記事あり(『大分合同新聞』1946年11月8日)	
1956	昭和31年	丙申		5月16日大分県美術協会物故七作家遺作展(大分市・教育会館)に11点出品(展覧会資料)。	
1968	昭和43年	戊申		10月 大分県美術百年展(大分市・大分文化会館)に出品される(『大分の近代美術』)。	





図1 《薩摩街道の冬》  
1921（大正10）年頃  
麻（カ）、着色  
167.8×376.0 cm  
大分市美術館蔵



図2 《村の秋晴（下図）》  
1930（昭和5）年頃  
紙・着色  
大分市美術館蔵





図3 《村の秋晴》  
1930（昭和5）年  
紙本着色  
227.0×186.0cm  
大分市美術館蔵  
第11回帝展（入選）



图4 《山陰絵行脚》  
1930（昭和5）年  
紙本着色  
152.0×153.0cm  
（各図17.6×26.0cm）  
13図  
個人蔵





图5 《山水图》

1933（昭和8）年

纸本墨画、纸本墨书

（画）120.0×25.3（书）120.0×21.5 cm

大分市美术馆藏



汝語々真率目汝世為迂吾行々痴鈍指吾世為愚吾愚汝未棄汝迂吾所娛曰迂與曰愚俱  
 任世所呼二者身外事無損汝與吾每暇汝來訪說舌說上都上郁信美哉第一山水區第二絃  
 歌海第三綺羅居丹丘酒盈甕旋江鯉上厨一個無苦惱百般有歡虞詩所謂樂園亦不外於渠  
 他日吾與汝携手合回車迂愚已論耳同醉口鳴々當作同醉歌併傳同醉圖  
 昭和甲戌花節寫於宇佐庵此日春雨惡々靜且清焚香把筆作斯圖併錄田蕪詩以寓閑興為自娛  
 西野堂

图6 《二叟图》

1934 (昭和9) 年  
 紙本着色・紙本墨書  
 134.1×28.0cm 他  
 大分市美術館藏



图7 《良寛稚児焚火図》  
1936（昭和11）年  
絹本着色  
129.0×33.3cm  
大分市美術館蔵





图8 《稚児焚火図》  
1936（昭和11）年  
紙本着色  
135.3×166.1cm  
大分市美術館蔵





图9 《閑牕讀古書》  
1937（昭和12）年  
絹本墨画  
127.6×34.0cm  
大分市美術館蔵



图 10 《秋庭》  
1938（昭和 13）年  
絹本着色  
160.8×186.2cm  
大分市美術館蔵



图 1 1 《幽居不知門外事》  
1938（昭和 13）年  
絹本墨画  
129.0×34.2cm  
大分市美術館蔵

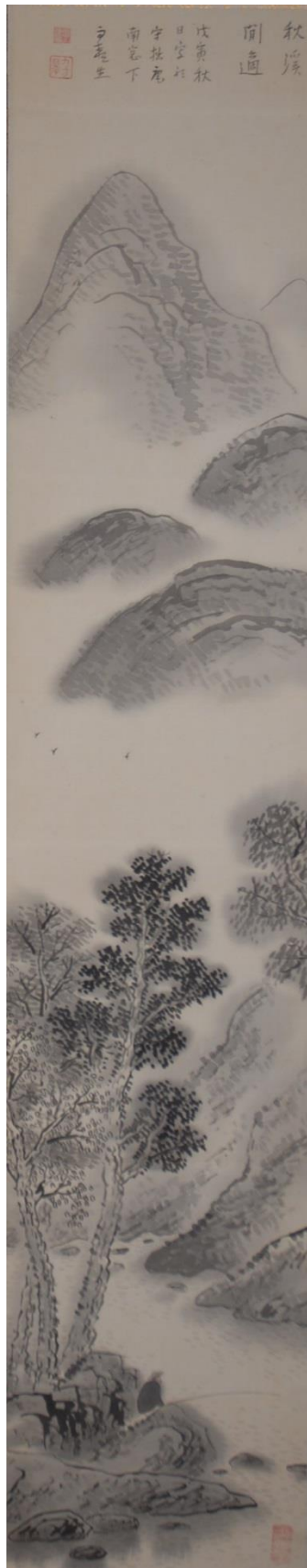


图 1 2 《秋溪間適》  
1938 (昭和 13) 年  
絹本墨画  
129.6×27.2cm  
大分市美術館蔵



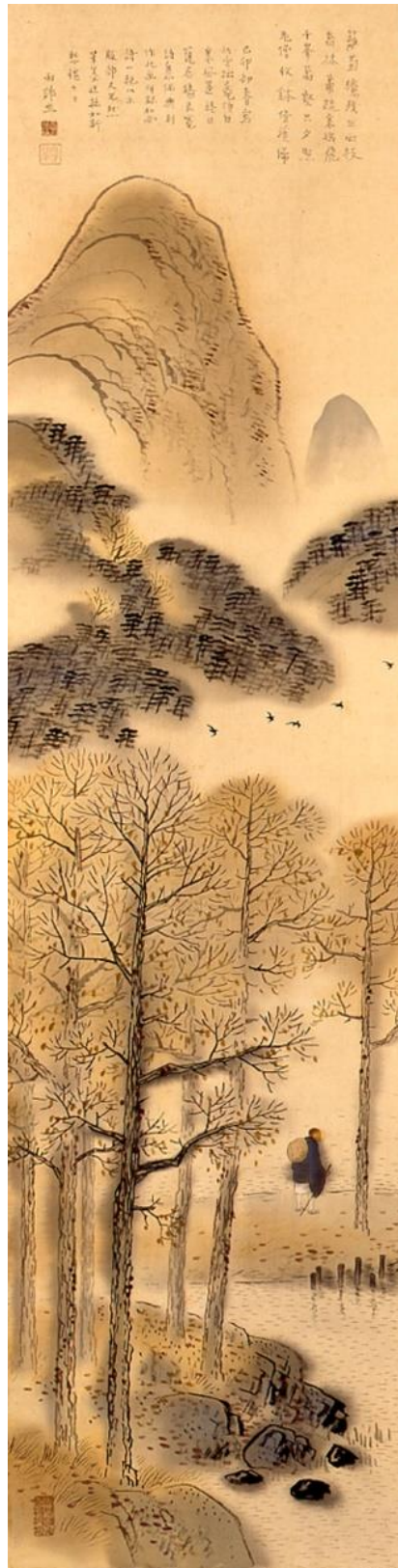


图 13 《晚秋山水图》  
1939（昭和 14）年  
絹本着色  
130.0×33.5cm  
大分市美術館藏